

看護学生に対するWebCT「社会福祉コース」の構築と その課題

平野, 裕子
九州大学医学部保健学科

小原, 裕子

<https://doi.org/10.15017/1470661>

出版情報：九州大学情報基盤センター広報：学内共同利用版. 3 (2), pp.45-55, 2003-07. 九州大学情報基盤センター
バージョン：
権利関係：

看護学生に対する WebCT「社会福祉コース」の構築とその課題

平野（小原）裕子*

<はじめに>

2002年12月～2003年2月にかけて、医学部保健学科（医療技術短期大学部）において、医療技術短期大学部在籍の看護学専攻学生（1年生）81名に対して WebCT「社会福祉コース」を導入しました。わずか3ヶ月間でしたが、本コースは、本学科において本格的に WebCT を取り入れた、最初のケースとなりました。WebCT のマニュアルもまだ充実していないなか、試行錯誤の日々ではありましたが、情報基盤センターの先生方や保健学科の大喜先生をはじめ、多くの方々のサポートをいただきながらなんとかコースを構築し、学生に使用させ、またその効果を測定することができました。本稿では、WebCT を使用することによって得られた様々な経験を報告することによって、WebCT の持つ可能性と課題について考えてみようと思います。ちなみに、筆者は決してパワーユーザーではありません。情報リテラシーの程度については、ごく一般の教官レベルであると思っています。しかし、この事実が「パワーユーザーでなくても使える WebCT」という宣伝文句に使われるなら幸いです。



写真：医学部保健学科の情報処理室で WebCT に取り組む看護学生たち

*九州大学医学部保健学科 E-mail: hirano@shs.kyushu-u.ac.jp

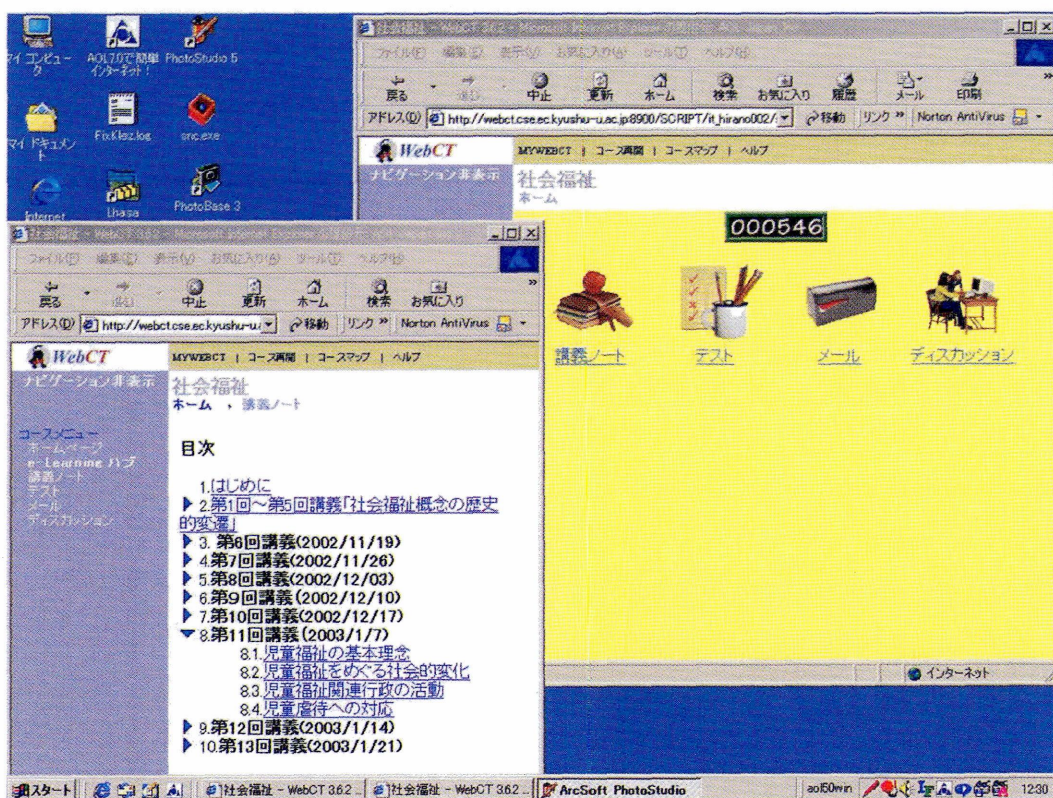


図1：WebCT「社会福祉コース」のホーム（右）と「講義ノート」の目次（左）

<WebCT 導入まで>

まだ WebCT を導入されるかどうか迷っておられる教官の方へは、なにはともあれ、まず WebCT に触れてごらんになることをお勧めします。情報基盤センターが開催する WebCT 講習会は、非常にわかりやすいコースが用意されていて、学生としての疑似体験ができます。筆者自身、「社会的構造主義型学習モデル」⁽¹⁾を教育の信条としておりますから、自分の講義はデジタル化にはなじまないものと思っていましたが、いざ WebCT を使ってみると、ゲーム感覚で結構面白かったのです。ことに「テスト・アンケート」機能は、何度でも繰り返して同じ問題を解くことができるので、これは学生にウケると思われました。

結局一念発起して、自分が担当する専門科目「社会福祉」に WebCT を導入することにしたのですが、その理由は、WebCT を用いることによって、学習者が「好きなときに好きなだけアクセスできる」という時間的な自由度を十分生かせると思ったか

らです。膨大な専門知識をとにかく片っ端から詰め込み、なんとか及第できる点数を取らせるためには（これは決して筆者好みの教育方針ではないのですが、哀しいかなそれが職業人を養成する学科の専門科目の現実なのです）、講義時間外においても徹底した復習をくりかえさせなければなりません。そのために、WebCTの「講義ノート」機能を使うことで、講義の重要なポイントを提示して、学生が復習したいときに自由にできる環境を作ることができると考えました。また、「メール」を通じて、わからないところを教官にいつでも気軽に聞ける場を提供できると考えました。

一方で、「社会福祉」という学問領域の性質上、単に知識を詰め込むだけに終わらせたくはありませんでした。やはり、社会福祉ニードを持つ人々に対する理解を深めるためには、社会問題を多面的にとらえる能力を養う必要があります。そのためにも、他者の意見を聞き、自分の意見を述べることは不可欠です。しかしながら、現在のカリキュラム上、講義中に討論のための時間を十分に割くことはできません。また、今日の学生たちは、たとえクラスメートであってもお互いに対面して討論をすることには慣れていないので、それを講義時間内に行うのは難しいと思われました。しかし、WebCTの「ディスカッション」機能を用いるならば、普段携帯電話のメールの受送信に慣れた学生たちのこと、質問や社会福祉に関する自分たちの意見をどんどん出してくれるのではないかと期待しました。

このように、WebCTを導入する前に、自分の講義にどういう風に利用できるのかと考えることが重要ですが、その他に、コース・デザインにかかる時間と費用（TAは活用できるか等）を確認しておく必要があります。とにかく、初めてWebCTのコースを構築する時は、想像以上の時間と労力がかかるものです。

<コースを設計する>

次にコースを設計します。コース設計に関しては、参考文献⁽²⁾も見当たらなかったため、我流で設計しましたが、ポイントをいくつか決めました。

まず、コースの目標としては、1. 「社会福祉」概念の変遷を、歴史的背景と関連づけて説明できる」2. 「社会福祉」各論における専門知識について、正しく理解できる」「3. 社会福祉ニードを持つ人々を多面的にとらえ、そのニードを満たすための方策について説明できる」という点に決めました。

次に、コースの実施ですが、WebCT「講義ノート」機能を用い、講義が終わるたびに、〇月〇日第〇回講義の講義ノートという風に、順次掲載していきました（計

54 ページ)。「講義ノート」とは、WebCT コンテンツモジュールを使用して作成します。これは、いわゆる教科書や講義資料に相当します。「社会福祉コース」では、講義のポイントが赤字で表示したテキストを準備し、平易な口語による解説をつけました(図2)。

また、理解度を自分でチェックするために、「テスト・アンケート」(計78項目)を作成しました。「テスト・アンケート」とは、様々な種類の問題を作成し、オンラインで問題に回答することができるシステムです。作ろうとする問題のタイプにより、選択・整合・短答・小論文形式があります。選択・整合・短答問題は、正解をあらかじめ設定しておけば、学生がテストを終了した時にすぐ採点され提示されます。小論文形式は、一つ一つ教官が回答し点数をつけなくてはなりません。学生ごとに具体的なアドバイスを付けて戻すことができます。従って学生は、その場で自分の回答をチェックすることができ(セルフ・テスト形式)、繰り返し学習することで、正しい知識を身に付けることができます。

また、講義中に取り上げた話題について、「ディスカッション」機能を使って次回講義までにディスカッションに参加する課題を提出(計6回)しました。この他に、「メール」機能で、教官に直接質問できるようにも設定しました。

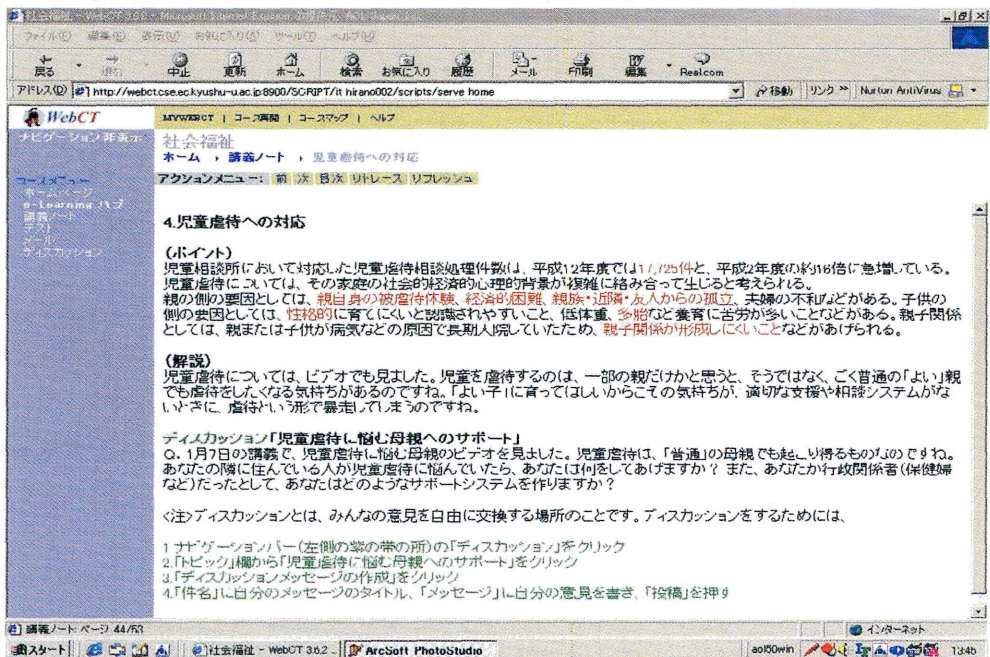


図2:「講義ノート」の一例

<学生に対する講習会>

次に、学生に対して WebCT の講習を行います。学生向けにマニュアルを作成すると、パソコンに使い慣れた者はどんどん自分で WebCT を使いこなしていきます。パソコンを使い慣れない者も、基本的な情報リテラシーのある者は、最初はマニュアルと首っ引きだったとしても、じきに慣れてきます。ただ、慣れるまでは、情報処理室に学生を集めて、WebCT のソフトウェアの立ち上げから終了までの実習指導を行った方がよいでしょう。その際、学生の数にもよりますが、WebCT を使ったことのある指導者が 2,3 人はいた方がよいと思われます。なぜなら、初めて WebCT を使う学生たちの「ソフトがひらかない」「編集中のウィンドウが消えた」といった悲鳴で情報処理室が大混乱になるからです。

筆者は、学生がうまくアクセスできない場合は、社会福祉担当教官（筆者）か情報科学担当教官に尋ねるように指導し、いずれかの教官が常駐するようにしました。この配慮は特に導入初期には最低限行うべきであると思います。じきに、使いこなせるようになった学生が、教官の代わりに使いこなせない学生を指導してくれるようになります。

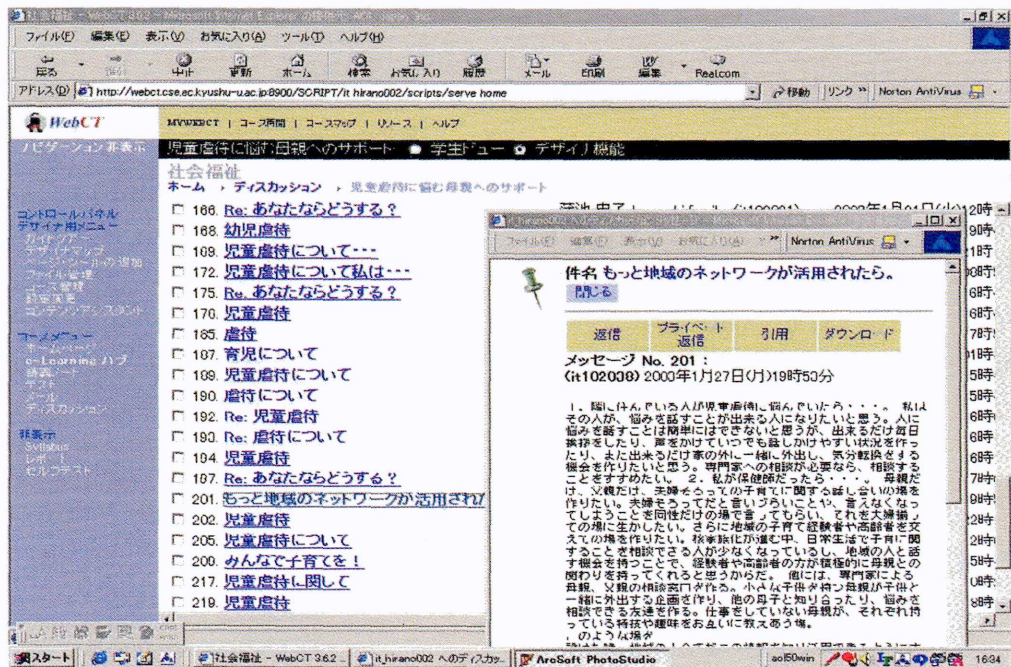


図 3：講義中にビデオを見て「児童虐待に悩む母親へのサポート」のあり方についてのディスカッションを行った

<WebCT 導入の評価の測定>

いかなる教育方法を用いるにしても、その効果が的確に測定され、観察され、評価がなされなければ、教育はその意味をなしません。わが国では e-Learning 導入の歴史が欧米に比べ短いこともあって、e-Learning の評価を行う段階まではなかなか行っていないのが現状です。そこで、筆者は WebCT の導入にあたり、その評価を二つの側面から行うことにしました。

まず一つ目には、学生自身による WebCT 評価です。これは、WebCT 使用期間の最終日に WebCT 上で行ったアンケート調査で、学生のパソコンやインターネットへのアクセス環境、期末試験の勉強に WebCT を使ったかどうか、ということとあわせ、WebCT の各機能に関する評価を尋ねることで測定しました⁽³⁾。二つ目には、講義内容の理解度を期末試験得点で測定し、それに対して WebCT へのアクセスがどのように関連しているかを分析することで、WebCT の学習効果を明らかにすることを試みました⁽⁴⁾。

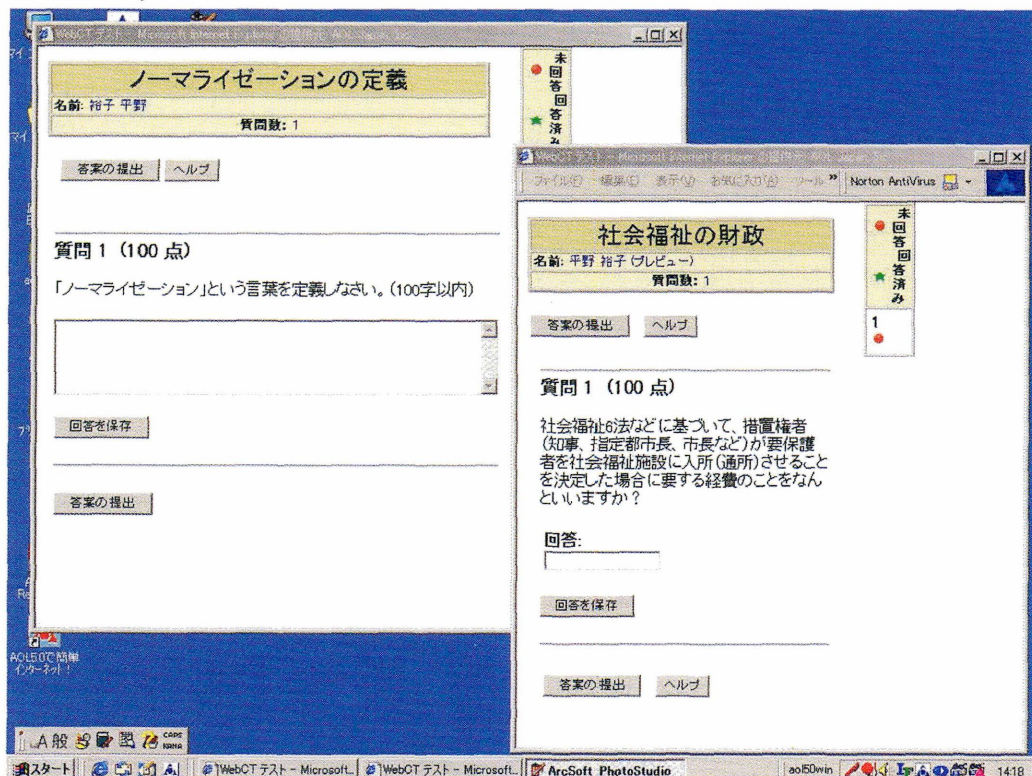


図 4：セルフ・テストの一例。短答形式（右）、小論文形式（左）などがある。

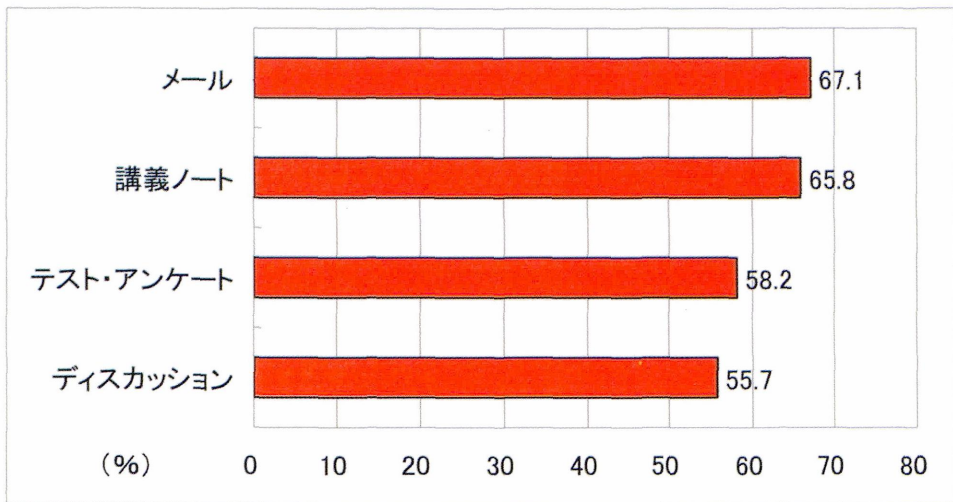


図 5 : WebCT の機能評価 (操作しやすい・どちらかといえば操作しやすい)

<WebCT に対する学生の反応と学習効果>

まず、WebCT に対する学生の評価についてですが、WebCT のどの機能についても、5 割以上が「操作しやすい・どちらかといえば操作しやすい」と回答していることが明らかになりました。ことに「メール」は 7 割近くが操作しやすいと回答しており、普段携帯電話でメールを使い慣れた学生たちにとって、WebCT の導入はあまり抵抗がなかったことが伺えます。

また、WebCT の各機能が役に立ったかどうかの問いに対しては、「役に立った・どちらかといえば役に立った」と回答した者が多い順に「ディスカッション」機能 (74 名 : 93.7%)、「講義ノート」機能 (63 名 : 79.7%)「テスト・アンケート」機能 (61 名 : 77.2%) であることが明らかになりました。

「役に立った・どちらかといえば役に立った」と回答した者が最も多かった「ディスカッション」機能については、「他の人の意見を聞くことができたから」に類型化される自由回答が全ての者に見られました。特に、匿名での投稿ができるような設定は、他者に気兼ねなく発言できるようになったと好評であったようです。しかしながら、実際に投稿された「ディスカッション」の発言内容を分析すると、お互いに自分の意見を披露することに終始しているものが多く、相手に対して自分の意見を戦わせるという、ディスカッションの本来の形態をとったものはほとんどみられませんでした。そこで、途中で筆者が匿名で議論を吹きかけてみましたが、それに対する反応は

やはり鈍いものでした。このことは、普段学生同士で、ある話題について面と向かって討論することに慣れていないために、本来のディスカッションに対する関心や意識が低いことを反映していると思われますが、やはり WebCT 導入が 3 ヶ月間では、ディスカッションを繰り返すには期間が短かすぎたのかもしれない。

「講義ノート」機能については、「講義で聞き逃したところを確認することができたから」(32 名)「講義内容の解説がしてあったので、より詳しく理解することができたから」(29 名)に類型化される回答が多くみられました。このことから、「社会福祉」の講義内容を的確に理解させるのに WebCT を利用するという、コースの目標が達せられたと考えてよいと思います。

また、「テスト・アンケート」機能については、「テスト勉強に役立ったから」(58 名)に類型化される自由回答が最も多く、WebCT が主観的にもテスト勉強に役立つと認識されていることが明らかになりました。また実際に、講義内容の理解度の客観的な指標としての期末試験得点は、「テスト・アンケート」機能へのアクセスとの間に $r = .524$ ($p < 0.01$) という強い相関を見ました。つまり、「テスト・アンケート」機能へのアクセスが多いほど、期末試験の得点が高いということになります。

なお、本コースでは、期末試験の勉強の際に、教科書や副教材と合わせて WebCT を利用したと回答した学生において、全く WebCT を利用していないと回答した学生よりも有意に期末試験得点の平均値が高いことが明らかになりました ($p < 0.01$)。このことから、「テスト・アンケート」は試験前の力試しとして利用され、教科書や副教材を一通り学習した者が、「テスト・アンケート」機能を用いて効率よく復習した結果、より高い得点獲得に結びついたものと思われました。

Rosenberg は、e-Learning は講義と並行して用いる(Blended Learning)ことで、最もその効果を発揮する、と述べています⁽⁵⁾。つまり、Blended Learning は、対面式授業形式とオンライン形式を組み合わせた教育方法のそれぞれの長所を組み合わせることができるというわけです。本コースを受講した学生は、WebCT のみを用いて試験勉強をした者はおらず、WebCT は教科書及び副教材を補う補助教材として用いられていました。従って、WebCT を用いて試験勉強を行った者については Blended Learning の効果があったと考えてよいと思います。

<予期せざる WebCT の効果>

このように、WebCT は期末試験をクリアするという一つの目標に向かって「何と

か及第できる点数と取らせる」ためには役に立つことが明らかになりましたが、その他に予期せざる効果も生み出しました。それは「メール」機能を導入することで、学生一人一人と教官との間の意思疎通がたやすくなった結果、二者間の心理的距離が縮まったことです。

筆者は看護学生の担任ではないので、普段は学生に対して個人的指導を行うことはありません。従って、学生もよほどのことがない限り、相談を持ちかけて来ることはありませんでした。ところが、WebCTの「メール」機能を使い、筆者にメールを出す、という課題を出したところ、時間が経過するに従って、かなり頻繁に筆者に対して伝言を送ってくる学生が増えてきました。学生にとって、「メール」とは普段携帯電話で使い慣れている機能ということもあり、教官に対しても、友達に対してメッセージを送るように軽い気持ちで使っていることが分かります(図6)。この結果、「教官と交流できるから」という理由でメールを役立ったと回答している者が7名にのぼり、また、WebCT使用期間後もメールをきっかけとして個人的な相談のために筆者の研究室を訪れる者も増えました。これらは、当初意図しなかったWebCTの機能でしたが、学生との交流のきっかけに一役かうことは、その後の学生と教官との関係をスムーズなものとする上でも重要な役割を果たしうるといえるでしょう。

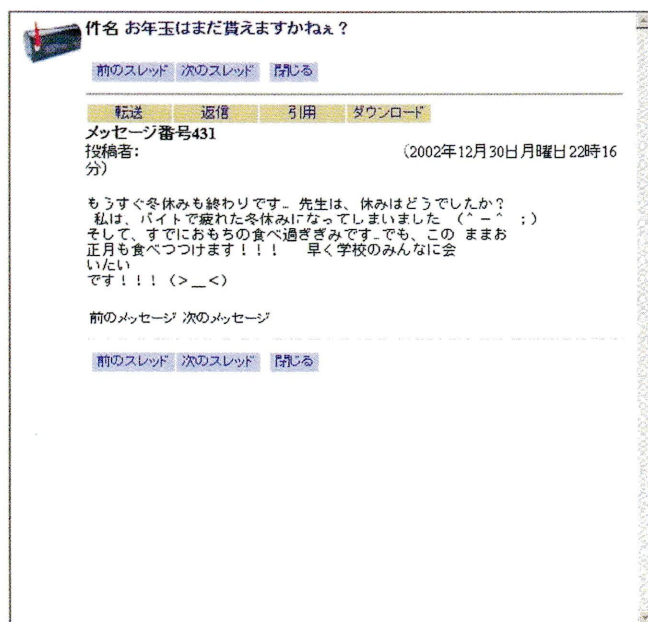


図6：絵文字などを入れて、友達感覚で教官にあてたメールメッセージ

<WebCT の課題>

一方、WebCT を使っているうちに、様々な課題も浮かび上がってきました。まず、本コースのように、一部の課題を除き、学生の任意において WebCT を使用させた場合、全くコンテンツにアクセスしなかった者が全体の 1 割近くを占めたことです。このことは、e-Learning が全ての学生に完全に受け入れられてはいないことを示唆していると思われます。今回、アンケート調査の中で、他教科においても WebCT コースを導入することを希望するかどうか、という質問をしたところ、本コース受講者のうち 16 名 (20.3%) は希望しない、と回答しています。その理由として、「家から WebCT にアクセスできないから」(12 名) という WebCT へのアクセスの環境について挙げた者の他に、「WebCT とは異なる自分の勉強スタイルがあるから」(3 名) との回答があることは注目に値します。WebCT と異なる自分の勉強スタイルとしては、具体的に、「授業中に話してくれた方がいいから」「コンピューターよりも書面の方が見やすいから」などがあげられました。

アクセス環境については、本コース受講者の 34 名 (43.0%) が自宅や下宿からインターネットのアクセスができると回答していました。学習効果の点から言えば、自宅や下宿から WebCT にアクセスできる環境にあった者となかった者では期末試験得点の平均値に有意な差は見られませんでした。学生の間で不公平感が残っていることは事実です。このことから、WebCT の普及には、まず学生のインターネットへのアクセスの格差をできるだけ少なくしていくことが大切であると思われました。なお、電話回線では WebCT のソフトウエアの立ち上がりがひどく遅く、自宅からアクセスできたとしても効率よく勉強できないとの自由回答も寄せられたことも考慮すべきでしょう。いまだ全ての家庭が ADSL や光ファイバーによる通信を導入しているわけではないことを考えると、この問題はまだ解決が少し先延ばしになりそうです。

その一方で、情報化の波に乗ることのできない、少数派の存在も考慮すべきではないかと考えます。いくら情報リテラシーや e-Learning へのアクセス環境が整備されたとしても、また、どんなに WebCT 機能が改良されたとしても、それが全ての人にとって最もよい学習方法であるとは言えないことを、学生たちの自由回答は教えてくれています。

<おわりに>

WebCT 「社会福祉コース」を導入することを通して、一番勉強になったのは教官

である筆者自身ではなかったかと思えます。e-Learning とは、単にコンピュータ技術を修得させたり、コンピュータを学習に取り入れることではない⁽⁶⁾ のであり、コンピュータという「道具」が先にあって表現したいテーマ（教える内容）がない、という態勢は問題です。つまり、教官側がコンテンツそのものの内容を常に検討し、「ウェブの特長を生かした切り口で編集しなおす」⁽⁷⁾ という工夫をしないで、単にコンピュータを導入すればよいという考え方でいけば、コンテンツは魅力的なものにはなりません。その結果、コンテンツがつまらないことによる学習意欲の低下につながってしまっただけでは、教育方法としては全く本末転倒です。

対面講義式にせよ、オンライン形式を導入するにせよ、「何をどのように教えるのか」という教育の根本的な問題は、常に教官に問われ続けていると言えるでしょう。

<注釈および参考文献>

- (1) 「社会的構造主義型モデル」：真理は多様であり、絶対的、客観的な事実は存在しないという考え方（阿諏訪博一：効果的な E ラーニングを実現するための観点，企業と人材 11 月 20 日号 2002，pp.11-18
<http://www.himanvalue.co.jp/houkoku/kj/20021120/20021120.htm>)
- (2) 今では、名古屋大学からよい手引き書がでていますから、ご参考になさるのがよろしいでしょう。（名古屋大学高等教育研究センター・情報メディア教育センター編：名古屋大学版 e-ラーニングハンドブック，名古屋大学，2003）
- (3) 詳細については、平野（小原）裕子，大喜雅文：WebCT を使用した講義評価に関連する要因－看護学生に対する「社会福祉コース」履修者のデータ分析から－，九州大学医学部保健学科紀要 2：2003，pp.57-72 をご参照ください。
- (4) 詳細については、平野（小原）裕子，大喜雅文：WebCT の利用状況と学習効果に関する研究－看護学生に対する「社会福祉コース」履修者のデータ分析から－，九州大学医学部保健学科紀要 2：2003，pp.47-56 をご参照ください。
- (5) Rosenberg M.J.: E-Learning, Building Successful Online Learning in your Organization: McGraw-Hill, 2001, pp.214-215.
- (6) 高島秀之：IT 教育を問う－情報通信技術は教育をどう変えるか－，有斐閣選書，2001，p.3
- (7) 森田正康：e ラーニングの<常識>，朝日新聞社，2002，p.100